613-001467 Rev.B 110729

Allied Telesis

CentreCOM® x200シリーズ リリースノート

この度は、CentreCOM x200 シリーズをお買いあげいただき、誠にありがとうございます。このリリースノートは、取扱説明書、コマンドリファレンスの補足や、ご使用の前にご理解いただきたい注意点など、お客様に最新の情報をお知らせするものです。
最初にこのリリースノートをよくお読みになり、本製品を正しくご使用ください。

1 ファームウェアバージョン 5.3.4A-1.2

2 重要：注意事項

2.1 ファームウェアバージョン 5.3.4A-1.2 リリース前に IPv6 ライセンスを購入された方へ

ファームウェアバージョン 5.3.4A-1.2 リリース前に IPv6 ライセンスを有効化した機器で UDLD/SNMP の IPv6 対応機能を使用する場合は、IPv6 ライセンスのライセンスパスワードを更新する必要がありますので、弊社サポートセンターまたは保守契約締結時にご案内差し上げております「窓口のご案内」記載の窓口までご連絡ください。

3 本バージョンで追加・拡張された機能

ファームウェアバージョン **5.3.4A-0.1** から **5.3.4A-1.2** へのバージョンアップにおいて、以下の機能が追加・拡張されました。

3.1 AT-x200-GE-28T

参照「取扱説明書」

本バージョンより、新機種 AT-x200-GE-28T をサポートします。

3.2 LLDP

参照「コマンドリファレンス」/「運用・管理」/「LLDP」

IP 電話などに設定情報を通知する LLDP とその拡張機能 LLDP-MED（LLDP for Media Endpoint Devices。ANSI/TIA-1057）をサポートしました。本製品では、LLDP とボイス VLAN を併用することにより、スイッチポートに接続された LLDP-MED 対応 IP 電話などに対し、音声データとその他のデータを区別して送信するよう指示することができます。初期設定では、LLDP を有効化すると LLDP-MED も自動的に有効化されます。

3.3 SNMP の IPv6 対応

参照「コマンドリファレンス」/「運用・管理」/「SNMP」

SNMP が IPv6 に対応しました。これに伴い、snmp-server コマンドに ipv6 オプションが追加されました。

3.4 sFlow

参照「コマンドリファレンス」/「運用・管理」/「sFlow」

ネットワーク上のスイッチやルーターを流れるトラフィックをモニターする、sFlow 機能の sFlow エージェントとしての動作をサポートしました。

3.5 ボイス VLAN

参照「コマンドリファレンス」/「L2 スイッチング」/「バーチャル LAN」

LLDP-MED との併用を前提とした音声データ用 VLAN を設定するための機能、ボイス VLAN をサポートしました。

3.6 IP サブネット VLAN

参照「コマンドリファレンス」/「L2 スイッチング」/「バーチャル LAN」

受信したタグなしパケットの始点 IP アドレスが特定のサブネットに属する場合、これを VLAN メンバーと見なす、IP サブネット VLAN 機能が追加されました。

3.7 プロトコル VLAN

参照「コマンドリファレンス」/「L2 スイッチング」/「バーチャル LAN」

受信したタグなしパケットの L3 プロトコルタイプフィールドに特定の値が格納されているパケットを VLAN メンバーと見なす、プロトコル VLAN 機能が追加されました。

3.8 UDLD

参照「コマンドリファレンス」/「L2 スイッチング」/「UDLD」

対向機器との間でフレームの到達性を監視し、フレームの送信、もしくは受信が正しく行えない単一方向のリンク状態を検出したとき、該当ポートをリンクダウンする UDLD（UniDirectional Link Detection）機能をサポートしました。

3.9 PVST+ Compatibility

参照「コマンドリファレンス」/「L2 スイッチング」/「バーチャル LAN」

PVST+ Compatibility をサポートしました。

3.10 IPv6 アクセスリスト

参照「コマンドリファレンス」/「トラフィック制御」/「アクセスリスト」

IPv6 アクセスリストをサポートしました。

4 本バージョンで修正された機能

ファームウェアバージョン **5.3.4A-0.1** から **5.3.4A-1.2** へのバージョンアップにおいて、以下の項目が修正されました。

4.1 起動時に以下のメッセージが記録されることがありましたが、これを修正しました。

AgentX: read, connection (sock xxxx) closed: length is zero

4.2 ファンの動作が正しく制御できていませんでしたが、これを修正しました。

4.3 電源の Off/On を繰り返し実行すると、まれに (約 1/400 回の割合) 起動後 リンクアップが検出されず、該当ポートが通信不可になることがありましたが、これを修正しました。

4.4 特権 EXEC モード時に「no?」でヘルプを表示することができませんでしたが、これを修正しました。

4.5 ログの送出先を email に設定した際、生成されたログのメッセージ数が少ない場合に email ログを送信しませんでしたが、これを修正しました。

4.6 起動時に以下のエラーログが出力されることがありましたが、これを修正しました。

user.warning localhost LOOPPROT[524]: AgentX: read, connection (sock 10) closed: length is zero

4.7 MAC アドレススラッシング検出時、動作のログが出力されませんでしたが、これを修正しました。

4.8 MAC アドレススラッシング検出時の動作に port-disable または link-down を指定したとき、検出後の動作継続時間内に、該当ポートに対して shutdown コマンドを no 形式で実行しても、手動で動作を解除できませんでしたが、これを修正しました。

4.9 SFP モジュールを何度も抜き差ししていると、SFP の抜き差しを判断できない状態となることがありましたが、これを修正しました。

4.10 ポート認証と LACP を同一ポートで併用することはできませんでしたが、これを修正しました。

4.11 MAC ベース認証が成功しても、MAC アドレスがハードウェアテーブルに登録されず、通信ができなくなることがありましたが、これを修正しました。

4.12 Web 認証時、IP アドレスが重複するサプリカントが存在した場合、認証処理を行っていないサプリカントを認証済みとしてしまうことがありましたが、これを修正しました。

4.13 1 ポートに対して秒間 1 サプリカントずつ、2 ポートから同時に Web 認証を行うと、認証を完了できないサプリカントが発生し、エラーログが出力されることがありましたが、これを修正しました。

4.14 1 ポートに対して秒間 1 サプリカントの速さで Web 認証を行うと、認証を完了できないサプリカントが発生し、エラーログが出力されることがありましたが、これを修正しました。

4.15 一度マルチプル VLAN（プライベート VLAN）の構成を組んだあとに、設定を削除する（プライベート VLAN が設定されていない状態に戻す）と、内部的に設定が残ったままになり、ホストポートとして設定されていたポート間で通信ができなくなっていましたが、これを修正しました。

4.16 IGMPv2 と IGMPv3 が混在している環境で、IGMPv3 ホストが TO_EX を含む Report メッセージを送出したとき、マルチキャストパケットが端末に送信されませんでしたが、これを修正しました。

4.17 arp-aging-timeout コマンドよって設定した時間を経過したあとも、ARP に応答しない PC の ARP エントリーがテーブルから削除されない場合がありましたが、これを修正しました。

4.18 x200 に接続している PC がリンクダウンを伴わずに、x200 のポートを移動した場合、ARP テーブルのポート情報が更新されず、通信できない場合がありましたが、これを修正しました。

4.19 IGMPv3 Report 受信時、IGMP メンバーの Expired time が常に 0 と表示されていましたが、これを修正しました。

4.20 スタティックチャンネルグループに WRR を設定すると、エラーが出力され、通常の手段では設定が解除できなくなりましたが、これを修正しました。

5 本バージョンでの制限事項

ファームウェアバージョン **5.3.4A-1.2** には、以下の制限事項があります。

5.1 システム

参照 **「コマンドリファレンス」/「運用・管理」/「システム」**

○ show tech-support コマンド実行時に不正なエラーメッセージが表示されます。これは表示だけの問題で、ファイルへの出力は正常に行われます。

○ インターフェースで受信可能な最大パケットサイズを 1518 バイト以上に設定した場合、1518 バイト以上のブロードキャストパケット、マルチキャストパケット、ジャンボフレームを受信すると、"BAD PACKET SIZE" というエラーが受信パケット数分出力されます。

5.2 ユーザー認証

参照 **「コマンドリファレンス」/「運用・管理」/「ユーザー認証」**

CLI ログインの認証に、RADIUS サーバーとローカルのユーザー認証データベースを併用する際は、RADIUS サーバーで先に認証を試みてからユーザー認証データベースによる認証を行うように設定してください。また、ユーザー認証データベースによる認証は、RADIUS サーバーへの通信ができない際のバックアップとして用いてください。

5.3 トリガー

参照 **「コマンドリファレンス」/「運用・管理」/「トリガー」**

定時トリガー（type time）を設定時、設定したトリガーの開始時刻とシステム時刻との差が少ないとトリガーが動作しません。トリガーの開始時刻とシステム時刻の差が 40 秒以上になるように設定してください。

5.4 SNMP

参照「コマンドリファレンス」/「運用・管理」/「SNMP」

○ 本製品で SNMPv3 を使用して、SNMP マネージャーとして SwimView を接続した環境において、本製品を再起動すると、SwimView との接続ができなくなります。
なお、SNMP マネージャーとして Swim Manager を接続した場合は、本現象は発生しません。また、SwimView を接続した場合でも、SNMPv1 または SNMPv2c を使用する場合は、本現象は発生しません。

○ Ether-Like.mib、dot3StatsTable の値が一部 CLI 上の値と一致しない場合があります。
dot3StatsTable には主にポートカウンター情報のオブジェクトがあります。
ポートカウンター情報は CLI の show platform port counters コマンドで確認してください。

○ 「no rmon collection stats」で RMON 統計情報エントリーを削除するときは、関連する RMON アラーム設定を先に削除してください。逆の順序で削除すると RMON 関連プロセスが異常終了します。

5.5 sFlow

参照「コマンドリファレンス」/「運用・管理」/「sFlow」

○ sflow collector コマンドで sflow の UDP ポートを設定したとき、コンフィグに反映されず、保存、再起動で初期設定に戻ってしまいます。再起動した場合は、再度設定してください。SNMP マネージャーから設定した場合も同様です。

○ sflow でタグなしパケットを受信した場合の ingress のサンプリング情報に、タグ情報が付与されています。

○ SNMP マネージャーから下記の Object を 1 以外に設定しても、sFlow サンプリング、sFlow カウンターは有効になりません。SNMP から有効にする場合は、下記のように設定してください。

- フローサンプリング
  sFlowFsReceiver : 1
  かつ
  sFlowFsPacketSamplinkgRate : 0 以外
  に設定
- カウンターサンプリング
  sFlowCpReceiver : 1
  かつ
  sFLowCpInterval : 0 以外
  に設定

5.6 SSH サーバー

参照「コマンドリファレンス」/「運用・管理」/ 「Secure Shell」

SSH サーバーのリスニング TCP ポート番号を 23 に設定しないてください。23 に設定すると不正なログが大量に出力されます。

5.7 インターフェース

参照 「コマンドリファレンス」/「インターフェース」

コンボポート、SFP ポートにおいて、polarity コマンドで mdi または、mdix 設定するとエラーになります。

5.8 ポートセキュリティー

参照 「コマンドリファレンス」/「インターフェース」/「スイッチポート」

○ ポートセキュリティーの restrict アクションを有効化しているポートにおいて、不正なパケットを受信するたびに SNMP トラップを送信します（SNMP トラップは、各 MAC アドレスに対して最初の一回だけ送信するのが本来の仕様です）。

○ ポートセキュリティーにおいて、不正パケット受信時のアクションとして shutdown（DISABLE）が実行されたときに、show port-security interface コマンドで表示される Port Status が ENABLED のままになります。

○ ポートセキュリティーにおいて、不正パケット受信時のアクションが実行されてポートがロックされたあと、ポートセキュリティーを無効にしても、show port-security interface コマンドで表示される Lock Status が LOCKED のままになります。

○ ポートセキュリティーにおいて、不正パケット受信時のアクションとして shutdown（DISABLE）が実行されたあと、clear mac address-table コマンドでスタティックエントリーを削除すると、show port-security interface コマンドで表示される Lock Status が LOCKED から UNLOCKED に変わり、ポートがリンクダウンしたままになります。
ポートのロックを解除するには、switchport port-security コマンドを no 形式で実行してください。

5.9 ループガード

参照 「コマンドリファレンス」/「インターフェース」/「スイッチポート」

○ MSTP を設定後、LDF 検出機能を有効にし、MSTP を無効にするか MST インスタンスに関連付けられた VLAN を削除すると、LDF が送出されなくなります。
LDF の送出を再開させるには、システムを再起動してください。
ただし、MST インスタンスを作成せずに MSTP を有効にしただけの場合は、現象は発生しません。また、RSTP では本現象は発生しません。

○ パケットストームプロテクションで検出する受信レートの値が、実際の値より高く検出されてしまいます。

○ パケットストームプロテクションで、Action が動作していないときに show mls qos interface storm-status コマンドで表示される Action のタイムアウトの残り時間が常にカウントされています。

5.10 スイッチポート

参照 「コマンドリファレンス」/「インターフェース」/「スイッチポート」

○ フローコントロール（802.3x PAUSE の受信）を有効にすると、スイッチポートのデュプレックスがオートネゴシエーション以外の固定設定であっても、フローコントロールが動作します。

○ SFP モジュールを装着した状態でシステムを再起動すると、ifOutDiscards カウンターがカウントアップします。本現象は AT-MG8T 装着時には発生しません。

○ egress-rate-limit コマンドでポートに送信レートの上限値を設定すると、上限値が設定されていないポートでも、送信レートが制限されることがあります。本現象は約 700Byte 以上のブロードキャスト、マルチキャストパケット送信時に発生します。

5.11 MAC アドレススラッシング検出

参照 「コマンドリファレンス」/「インターフェース」/「スイッチポート」

MAC アドレススラッシング検出時の動作に vlan-disable を指定したとき、検出後の動作継続時間内に、該当 VLAN に対して switchport enable vlan コマンドを実行しても、手動で動作を解除できず、VLAN を有効にできません。

5.12 リンクアグリゲーション

参照 「コマンドリファレンス」/「インターフェース」/「リンクアグリゲーション」

スタティックチャンネルグループ（手動設定のトランクグループ）とパケットストームプロテクションを併用するときは、グループ内のスイッチポートに対してパケットストームプロテクションを設定するようにしてください。スタティックチャンネルグループに対して設定すると、パケットストームプロテクションが正しく動作しません。

5.13 ポート認証

参照 「コマンドリファレンス」/「インターフェース」/「ポート認証」

○ 複数の Supplicant が同時に Web 認証を行った場合、いずれかの Supplicant の認証に失敗し、認証画面が崩れた状態で表示される（User name 欄だけが表示される）ことがあります。そのような場合は、Web ブラウザーで「再読込」を実行してください。

○ Web 認証と Auth-fail VLAN 併用時、認証失敗した Supplicant が Auth-fail VLAN の所属になったとき、Supplicant の Web 認証画面に認証失敗のメッセージが表示されず、「Authenticated」と表示されます。これは表示だけの問題で動作には影響しません。

○ Web 認証の Ping ポーリング機能を有効にし、auth-web-server ping-poll failcount コマンドで Supplicant がいなくなったと判断する Ping 無応答の回数を 1 に設定すると、Supplicant が Ping に応答しているにもかかわらず、認証が解除されます。failcount には 2 以上の値を指定するようにしてください。

○ 802.1X 認証または MAC ベース認証と MSTP を同一筐体内で併用し、かつ認証ポートでゲスト VLAN を使用した場合、認証成功時と認証解除時に不正なエラーメッセージが表示されます。これは表示だけの問題で動作には影響しません。

○ auth supplicant-mac コマンドで特定の MAC アドレスを持つ Supplicant 固有のパラメーターが設定されている場合、該当 Supplicant の認証にタイムアウトしていったん本製品から EAP-Failure が送信されると、その後 Supplicant から EAPOL-Start を受信しても、EAP-Request ではなく EAP-Failure を返すため、認証を開始できなくなります。

○ Web 認証において、auth max-supplicant コマンドで設定された最大数まで Supplicant が認証されている状態にもかかわらず、新たな Supplicant から Web 認証サーバーへのアクセスが可能です。この際、認証画面には HTTP 403 エラーが表示されます。

○ Web 認証のインターセプトモードが設定されているとき、no auth-web-server mode promiscuous コマンドの実行で、インターセプトモードの設定が無効になります。

○ Web 認証用の DHCP サーバー機能使用時、X.X.X.0 や X.X.X.255 など割り当てるべきでない IP アドレスや、別のネットワークの IP アドレスを貸し出す場合があります。Web 認証用の DHCP サーバー機能を使用する場合、ポート認証を使用するインターフェースには、ホスト部ができるだけ小さい値の IP アドレスを割り当てるようにしてください。

○ 同一ポート上で 802.1X 認証、MAC ベース認証、Web 認証を併用した場合、または MAC ベース認証と Web 認証を併用した場合に、Web 認証用 DHCP サーバー機能を使用すると、認証前の Supplicant が Web 認証用 DHCP サーバーから IP アドレスを取得できません。このような場合は、Web 認証用 DHCP サーバー機能ではなく、通常の DHCP サーバー機能を使用してください。

○ MAC ベース認証と Web 認証を併用している場合、Web 認証にて認証成功後、ログアウトして再度認証を試みると一回目の認証に必ず失敗します。認証画面を再読み込みしてから、再度認証してください。

5.14 VLAN クラシファイア

参照 「コマンドリファレンス」/「L2 スイッチング」/「バーチャル LAN」

○ VLAN クラシファイアルールにマッチしないパケットにおいて、その送信元 IP アドレスが VLAN インターフェースに設定されているアドレスと同一ネットワークアドレスのパケットの場合、ポート本来の VLAN に転送されません。VLAN インターフェースに設定されているアドレスと異なるネットワークアドレスのパケットの場合は、ポート本来の VLAN に転送されます。

○ 一つのルールで構成される VLAN クラシファイアグループと、そのルールを含む複数のルールで構成されるグループが、それぞれ異なるスイッチポート上に設定されているとき、一つのルールで構成されるグループをポート上から削除したあと、再び同一ポートに追加しようとするとエラーメッセージがコンソールに出力され、グループをポートに設定することができず、HSL エラーログも出力されます。

一つのルールで構成される VLAN クラシファイアグループを削除するより前に、そのルールを含む複数のルールで構成されるグループを他のポート上から削除してください。

その後、一つのルールで構成されるグループを削除することで、そのグループを同一ポートに設定しなおすことができます。

5.15 スパニングツリープロトコル

参照「コマンドリファレンス」/「L2 スイッチング」/「スパニングツリープロトコル」

○ BPDU ガード機能の動作中に、グローバルコンフィグモードにて spanning-tree portfast bpdu-guard コマンドを no 形式で実行してリンクアップしたあと、再度 spanning-tree portfast bpdu-guard コマンドを実行すると、BPDU ガード機能が動作しません。
ケーブルを抜き差しすることで、再度 BPDU ガード機能が動作します。
また、インターフェースモードにて spanning-tree portfast bpdu-guard コマンドを実行する場合は、本現象は発生しません。

○ 動作モードの設定（spanning-tree mode コマンド）が RSTP のとき、no spanning-tree force-version コマンドを使用して明示的なバージョン指定を削除することができません。no 形式を用いずに適切なバージョンを指定して設定しなおしてください。

○ ターミナルモニター実行中 spanning-tree enable コマンドを no 形式で実行すると不正なエラーメッセージが表示されます。これは表示だけの問題で動作には影響しません。

○ spanning-tree priority コマンドを no 形式で実行してもポートプライオリティーが初期値に戻りません。初期値に戻す場合は、spanning-tree priority コマンドでポートプライオリティーを 128 に変更してください。

5.16 EPSR とループガードの併用

参照「コマンドリファレンス」/「L2 スイッチング」/「EPSR」

EPSR と MAC アドレススラッシングプロテクション併用時、EPSR のトポロジーチェンジにより、ループが検出される場合があります。EPSR とループガードを併用する場合は LDF 検出機能を使用してください。

5.17 DHCP Snooping

参照「コマンドリファレンス」/「L2 スイッチング」/「DHCP Snooping」

DHCP Snooping 有効時、ループガードの LDF 検出によって port-disable の動作が継続しているポートでは、DHCP メッセージがフィルタリングされずに通過します。

5.18 ipv6 forwarding コマンド

参照「コマンドリファレンス」/「L2 スイッチング」/「IPv6」

ipv6 forwarding コマンドが no 形式で実行できません。IPv6 を無効化したい場合は、edit コマンドなどを用いてスタートアップコンフィグから同コマンドを削除し、再起動する必要があります。

5.19 IGMP Snooping

参照 「コマンドリファレンス」/「IP マルチキャスト」/「IGMP Snooping」

○ ip igmp static-group コマンドで source パラメーターを指定しても、指定した送信元 IP アドレス以外からのマルチキャストパケットも指定したポートにだけ送信してしまいます。

○ フィルターモードが Exclude モード（MODE_IS_EXCLUDE）で、送信元アドレスが指定されている IGMPv3 Report メッセージを受信しても、該当グループが登録されません。送信元リストが空の MODE_IS_EXCLUDE は正しく認識されます。

○ CHANGE_TO_INCLUDE_MODE を Record Type に持つ IGMPv3 Report メッセージを受信しても、グループのフィルターモードが Exclude から Include に切り替わりません。これは、RFC3376 に準拠した正しい動作となります。

○ BLOCK_OLD_SOURCES を Record Type に持つ IGMPv3 Report メッセージを受信しても、すでに登録されている送信者リストから削除されません。また、ルーターポートに上記の Report メッセージが転送されません。

○ IGMPv2 ホストと IGMPv3 ホストが同一 VLAN 上に存在する場合、IGMPv2 ホストによるグループへの参加が先に行われていると、あとから CHANGE_TO_EXCLUDE{} を Record Type を持つ IGMPv3 Report メッセージを受信しても認識できません。マルチキャストルーターからの General Query メッセージに対して、IGMPv3 ホストが MODE_IS_EXCLUDE の Report メッセージを返した場合は、正しく認識します。

○ IGMP Snooping をいったん無効にし、再度有効にする場合は、システムを再起動してください。

5.20 MLD Snooping

参照 「コマンドリファレンス」/「IPv6 マルチキャスト」/「MLD Snooping」

○ MLDv2 Snooping において、グループのフィルターモードが Exclude モードであるにもかかわらず、送信元リストの当該アドレスを送信元とするマルチキャストパケットが転送されます。
Include モードではマルチキャストトラフィックは正常にフィルタリングされます。

○ ルーターポート上で BLOCK_OLD_SOURCES を Record Type に持つ MLDv2 Report メッセージを受信しても、送信者リストの当該アドレスは削除または変更されません。

5.21 アクセスリスト

参照 「コマンドリファレンス」/「トラフィック制御」/「アクセスリスト」

○ グローバルコンフィグモードで IGMP Snooping を無効にすると、show platform classifier statistics utilization brief コマンドで表示される ACL（ハードウェアアクセスリストによる内部領域の消費量）が -1 になります。これは表示だけの問題で動作には影響しません。

○ ハードウェアアクセスリストを作成するときに、終点ポート番号を範囲で指定した場合、範囲の上限値が始点ポート番号に指定した値よりも小さいとエラーで設定ができません。

例）始点ポート番号：80、終点ポート番号：1 ～ 60 を許可
access-list 3001 permit udp any eq 80 any range 1 60

このような場合は、アクセスリストを 2 個に分けて作成することで、設定が可能になります（61 ～ 80 を破棄する設定を追加します）。
access-list 3000 deny udp any eq 80 any range 61 80
access-list 3001 permit udp any eq 80 any range 1 80

5.22 Quality of Service

参照「コマンドリファレンス」/「トラフィック制御」/「Quality of Service」

○ QoS ポリシーマップが適用されたスイッチポートに対して、適用を解除する設定を行っても、該当インスタンスにおいて QoS が使用するシステム内部領域が一つ消費されたままになり、すべての領域が解放されません。
すべての領域を解放するには、システムを再起動してください。

○ QoS ポリシーマップのフィルタリング機能において、フレームフォーマットに 802.2 LLC を指定しても、正しくフィルタリングされません。

○ QoS ストームプロテクション機能において、対象トラフィッククラスの受信レートが設定した上限値を超過した場合の動作として、受信ポートの無効化（portdisable）を指定していても、実際には受信ポートが物理的にリンクダウンします（linkdown 指定時と同じ動作になります）。

○ QoS ストームプロテクション機能において、受信レート超過時の動作に linkdown を指定したとき、動作継続時間内に shutdown コマンドを no 形式で実行しても、手動で動作を解除できません。ポートはリンクアップしますが、storm-downtime コマンドで設定された動作の持続時間が経過するまで、QoS ストームプロテクション機能を再開できません。

○ QoS ストームプロテクション機能において、storm-action コマンドを no 形式で実行して初期値（portdisable）に戻す設定をしても、コンフィグ上には「storm-action unknown」として反映されます。実際には、初期値である portdisable として正常に動作します。

○ QoS ストームプロテクション機能において、受信レート超過時の動作に vlandisable を指定したとき、動作継続時間内に該当ポートからポリシーマップを削除すると、switchport enable vlan コマンドを no 形式で実行しても、手動で動作を解除できなくなります。

5.23 DHCP サーバー

参照「コマンドリファレンス」/「IP 付加機能」/「DHCP サーバー」

DHCP サーバー機能において、リース時間が 59 秒以下に設定されている状態でクライアントに IP アドレスが割り当てられると、clear ip dhcp binding コマンドで DHCP サーバーのリース情報を削除できなくなります。

6　マニュアルの補足・誤記訂正

最新マニュアル（取扱説明書、コマンドリファレンス）の補足事項および誤記訂正です。

6.1　AT-x200-GE-28T の安全規格について

参照 「取扱説明書」（Rev.B）55 ページ

取扱説明書（Rev.B）55 ページ「本製品の仕様」の安全規格に「UL60950-1, CSA-C22.2 No.60950-1」の記載がありますが、AT-x200-GE-28T は本規格の認定を現在申請中ですので、訂正してお詫びいたします。

7　未サポート機能（コマンド）

最新のコマンドリファレンスに記載されていない機能、コマンドはサポート対象外ですので、あらかじめご了承ください。最新マニュアルの入手先については、次節「最新マニュアルについて」をご覧ください。

8　最新マニュアルについて

最新の取扱説明書「AT-x200-GE-52T 取扱説明書」（613-001396 Rev.B）、コマンドリファレンス「CentreCOM x200 シリーズ コマンドリファレンス」（613-001463 Rev.B）は弊社ホームページに掲載されています。

本リリースノートは、これらの最新マニュアルに対応した内容になっていますので、お手持ちのマニュアルが上記のものでない場合は、弊社 Web ページで最新の情報をご覧ください。

http://www.allied-telesis.co.jp/